

研究ノート

青木保憲『アメリカ福音派の歴史』への応答

富田雄治

序言

2013年6月の福音主義神学会東部春期研究会議では「福音主義とは何か」について二人の研究者による発題がなされた。興味深いテーマであったものの研究会への参加は叶わなかった。そこで筆者は投稿という形で議論に参加したいと考えた。

この研究会の発題者の一人、青木保憲は、2012年に『アメリカ福音派の歴史：聖書信仰に見るアメリカ人のアイデンティティ』¹（以下『米福音派』と略記）を公にしている。アメリカ・キリスト教史に関心を寄せる者としてこの出版を歓迎したい。青木自身も認めるように日本でのこのような研究には制約が多い²。それ故提示されたアメリカ福音派の歴史も検討の余地はあるかと思う³。それで

¹ (明石書房、2012年)『米福音派』の幾つかの論点は、青木保憲「Evangelicals と Fundamentalist の用語における歴史的考察」『福音主義神学』第45号（日本福音主義神学会、2014年）121-142頁（以下「歴史的考察」と略記）でも踏襲されている。

² 『米福音派』8頁

³ 栗林輝夫は4-5章で神学的分析が後退したと見る。栗林輝夫「書評：青木保憲著『アメリカ福音派の歴史』」『日本の神学』第52号（日本基督教学会、2013年）164-168頁。資料の制約による面もあるかと思うが、筆者も頷く面はあった。例えば4章で、1960-70年代にはパラ・チャーチ化したとされる福音派について、必ずしも十分な説明がされている訳ではないように思われる。

もこの研究によって、20世紀アメリカ福音派を歴史的に理解するための手がかりが与えられたことは否定できない。既に刊行から時間が経過し、多少時宜を逸した感もあるが、筆者はこの研究に幾つかの応答を試みたい⁴。

1、『アメリカ福音派の歴史』について

(1) 目的と内容

『米福音派』は、南北戦争後の根本主義運動発生期からレーガン政権誕生に貢献した宗教右派の黎明期に至る根本主義・福音派の歴史である。この研究は、アメリカ福音派とはどういう人々か、またなぜアメリカに福音派が多いのかという二つの問いについて、キリスト教史研究と社会学的分析によって解答を与えようとしている⁵。

『米福音派』は以下のように要約できる。序論では問題提起の後、fundamentalistやevangelicalなどの用語の定義が試みられ⁶、次いでアメリカと日本における福

⁴ 本稿は、『米福音派』に応答しながら、日本の福音主義神学に影響を与えて来た20世紀アメリカ福音派の歴史を振り返ることで、福音主義神学の現状理解に資する情報を共有することを目指す。アメリカ・キリスト教史を専攻した訳ではない筆者が『米福音派』への応答を書くことには弁明が必要であろう。筆者は1996-97年にゴードン・コンウェル神学校でG. Rosell教授による教会史とアメリカ・キリスト教史を受講した。新福音主義の視点からアメリカ福音派の歴史を教えられた者として、『米福音派』が提起した問題に応答を書くことは許されるのではと考えたのである。

⁵ 『米福音派』8、484頁。M. A. Noll, *American Evangelical Christianity: An Introduction* (Oxford: Blackwell, 2001) も20世紀アメリカ福音派の歴史的・社会学的研究の入門書であり、1章で歴史的概観がなされている。

⁶ 『米福音派』11-18頁を参照。西方教会史における「福音的派」(evangelical)の用語法の歴史はM. Noll, *The Rise of Evangelicalism* (Nottingham: IVP, 2004), pp.14-16で短く説明されている。本稿でfundamentalist(根本主義者)とは、第一次大戦期から1930年代にかけて「根本教理」を堅持し、近代主義者と対立した保守的プロテスタントを指す。根本主義運動は1940年代以降分離主義的グループと穏健なグループに分岐したが、20世紀後半におけるfundamentalistsは主に前者を指し、evangelicalsは主に後者を指す。Cf. G. Marsden, 'Fundamentalism,' *New Dictionary of Theology* (Downers Grove: IVP, 1988), pp. 266-268. ただ20世紀後半にはカトリック教徒の中にも、自らをevangelicalと自覚する人々も現れるようになった: Noll, *American Evangelical*, p. 37.

音派研究の研究史的概観がなされる。一章では「金ぴか時代」の社会変動を背景に、根本主義と近代主義の流れとが、どのようにプロテスタント教会の中に形成されたかについて論じられる。続く二章は、根本主義運動が、第一次大戦による反独感情の高まりと大戦後のモラルの低下を契機により先鋭的となり⁷、近代主義者と対立するようになった事情を説明し、大戦後の根本主義・近代主義論争、特にスコープス進化論裁判を概説している。三章では、第二次大戦中、根本主義陣営内に起きた新福音主義運動について説明されている。新福音主義運動は、穏健な根本主義者の代表機関となるNAE (National Association of Evangelicals)を設立し、フラー神学校の開校や*Christianity Today*誌(CT)の創刊などのプロジェクトを成し遂げ、またビリー・グラハムの大衆伝道とも連動しつつ、その運動を展開させたが、内部対立により停滞してしまう。一方で、新福音主義運動の指導者たちは多くの超教派団体を設立し、聖書信仰に立ちつつ既存の教団・教派の枠を超えた多様なネット・ワークを生み出した⁸。やがてこれらのネット・ワークに参集する人々が「福音派」と呼ばれるようになったとされる。四章では1960-70年代の危機の時代に、福音派が、公民権運動を始めとして、この時代にクローズ・アップされるようになった社会的問題に対し、多少の例外は除いて保守的立場を取り続けたことが明らかにされる。五章になると、福音派のテレビ伝道師たちが登場する。彼らはアメリカ人の道徳の回復を訴えて支持を集めるが、こうしたテレビ伝道師出身のパット・ロバートソンやジェリー・フォウエルなどにより宗教右派が形成された経緯が明らかにされる。そして根本主義者を自認したフォウエルの陣営に福音派の指導層が協力を約束したことで、80年代以降のアメリカ政治に宗教右派の影響力が増大するようになったと指摘しながら、一世紀に及ぶ叙述を結んでいる。終章では、20世紀アメリカ福音派を聖書信仰に立つ保守的プロテスタントと捉え、これは歴史

⁷ 青木は、第一次大戦や反独感情の高まりが、千年期前再臨説を普及させるとともに、根本主義運動をより好戦的なものとしたと説明する。『米福音派』151-154頁。この説明はM. A. Sutton, *American Apocalypse* (Cambridge, MA: Belknap, 2014), pp.49-57, 91-109でも踏襲されている。

⁸ 青木はこの傾向を「パラ・チャーチ化」と表現する。『米福音派』277-280、290頁

や伝統が浅く、統合の理念として「共通の未来」を必要とするアメリカ合衆国のプロテスタント保守派に特有の傾向であると結論付けている⁹。

(2)『アメリカ福音派の歴史』の意義

『米福音派』は、20世紀アメリカ福音派についての議論を先導しているという意味で重要な研究であり、少なくとも四つの点で貢献をしているのではない。

第一に、序論においてアメリカと日本における福音派研究の研究史的概観がなされ、先行研究が紹介されている点である¹⁰。その成果を踏まえつつ、自らも福音派へのアイデンティティを有する著者が20世紀アメリカ福音派の歴史を書いた。この点が重要ではないか。

第二に、これまで日本語では報告されて来なかった人物や事実が紹介されている点である。例えば20世紀アメリカ福音派の指導者という点、ビリー・グラハムやカール・ヘンリーの名が良く知られて来た。しかしハロルド・ジョン・オッカングー (Harold John Ockenga) と彼が関わった新福音主義運動について日本語で詳しく紹介したのは本書が最初ではないか¹¹。

また四章では、国家的危機の時代における福音派指導者たちの政治的・社会的発言が明らかにされている。例えば1960年代に、福音派が公民権運動に対してどのような発言をしていたかについても、CTの記事などに拠りつつ記されている。根本主義者・福音派の多くは、キング牧師の先見性に関して見通しを誤っており、結果的に社会的公正に対する意識の低さを露呈した¹²。こうした傾向を一次資料から浮き彫りにした点で、『米福音派』は20世紀アメリカ福音派の解明に貢献したと言える¹³。

⁹ 『米福音派』9-10頁には著者自身の要約がある。

¹⁰ 『米福音派』18-55頁

¹¹ 前掲書、227-237、245-259、264-273頁

¹² 前掲書、305-310頁。人種差別的傾向は20世紀前半の根本主義者にも顕著であった。Sutton, *Apocalypse*, pp.109-112, 168-175. その後アメリカを含む世界の福音派は、ローザンヌ誓約で、教会の社会的責任を軽視していた点を認め、悔い改めている。宇田進『福音主義キリスト教と福音派』(いのちのことば社、1993年) 229-230頁

¹³ 勿論、この面での『米福音派』による貢献は、上記の例に留まる訳ではない。

第三に、この研究が、アメリカ福音派を社会的かつ神学的に分析している点である。特に「統合作用」という概念を援用しつつ、20世紀アメリカに福音派の多く存在した理由を説明している点である。1960-70年代の対抗文化の隆盛によってアメリカでは社会変革を求める運動が拡大したが、主要諸教派は時流に対抗するメッセージを打ち出せずに教勢は低迷した。これに対して福音派が教勢を拡大したのは、道徳の再構築を訴えた彼らのメッセージが、宗教の重要な社会的機能である「統合作用」の役割を果たし、飽くなき変革を追求した対抗文化に疲れ、安定を求めるようになっていた多くの国民に受け入れられたからだとされる¹⁴。また結論で青木は、モルトマンや森孝一らの見解、即ち歴史の浅い多民族国家のアメリカ合衆国が、統合の理念として「共通の未来」を必要とするという見解に従い、聖書の終末予言を字義通りに解釈する千年期前再臨説などが受け入れられるのは、そのような事情によると説明する¹⁵。さらにこうした終末論の基底には聖書信仰があると分析する¹⁶。

第四に、この研究が、19世紀末から1980年頃迄の根本主義・福音派の歴史を、同時代史の文脈に位置づけ、さらにリベラル派の伝統と対比させながら通史的に概観し、これによって20世紀アメリカ福音派の特徴を描こうとした点で

¹⁴ 『米福音派』355-363頁

¹⁵ 森孝一「アメリカにおける国家と宗教—『見えざる国教』の過去と現在」『近代ヨーロッパの探究③ 教会』(ミネルヴァ、2000年) 99-101頁参照。森の著作において「共通の未来」とは独立宣言において表明された「自由、平等」などの理念のことである。

¹⁶ 『米福音派』96、478-482頁。このように根本主義者による千年王国の字義的解釈の前提に聖書信仰があるとして、両者を結びつけることによって根本主義を理解しようとする見方がある。Marsdenは、こうした根本主義理解を是正しようと試みたのではない。Marsdenによれば、根本主義運動は主にムーディーの信仰復興運動、ホーリネス運動、そしてディペンセーション神学に、より直接的起源を持っていた。これらの運動・神学には既存の政治・社会・文化を否定的に見る傾向があり、この傾向が危機の時代に好戦的姿勢となって現れ、伝統的見解が拒否されると、根本主義者の一部を教派や神学校から分離する方向へ駆り立てることになった。確かに根本主義者は聖書信仰を堅持することを主張したが、彼らの特徴づけた神学は、B. B. ウォーフィールドらの基礎付けた聖書観のみとはいき切らず、それ以外の要因もあった。G. Marsden, *Fundamentalism and American Culture* (New York: Oxford UP, 1980), pp.153-170.

ある。『米福音派』は、このようなフォーマットでアメリカ福音派の歴史を叙述することによって、次の点を論証しようとしているのではないか。即ち 19 世紀末の根本主義から 20 世紀福音主義に至る流れは、しばしば時代状況に影響を受け、その指導者たちの言動や神学的立場は度々変化し、さらに内部に様々な対立や多様性を抱えていた。それにもかかわらず、根本主義・福音主義は、その聖書信仰において一貫していた¹⁷、という点である。

2、『アメリカ福音派の歴史』への応答

こうした貢献を歓迎するとともに、筆者は以下の五点について応答を試みたい。第一は、アメリカ福音派の起源をどこに求めるかという問題である。第二は、新福音主義運動の実情である。この運動がどのようにして生み出され、なぜ停滞したのかを、オッカングーに焦点をあてて考えたい。第三は、根本主義と福音主義の連続性と非連続性の問題である。第四は、アメリカのプロテスタント・キリスト教における「共通の未来」と「共通の過去」の問題である。そして第五は、アメリカ福音派の現代的側面についてである。

(1) アメリカ福音派の起源

まずアメリカ福音派の起源の問題である。『米福音派』は evangelical の語源をドイツ語の evangelisch に求め¹⁸、南北戦争以前のアメリカ・プロテスタントが（同時代の欧州と比べて）総じて福音的であったと説明する¹⁹。そしてアメリカにおいてこの伝統が、自由主義の本格的挑戦を受けるようになったのは 19 世紀後半からであったとされている。

19 世紀末から 1920 年頃にかけて、アメリカの保守的プロテスタントの伝統に、それまでにない変化が生じたのは確かである。例えば 19 世紀初めにアメリカのユニテリアンは独自の教派を形成せねばならなかった。主要教派は、この

時点で、近代思想の影響をそれ程強くは受けてはいなかったと言える²⁰。そうした中で北部のリバイバル派にはチャールズ・フィニーのように革新的傾向を持つ指導者もいた。フィニーは奴隷制廃止論者で男女共学の推進者であったし、ホレス・ブシュネルとも僅かながら交流があった。フィニーのような人物はブシュネルと親近感を感じる面があったようである²¹。一方アメリカ・プロテスタントの有力な教派であった長老派において、神学的に保守的であったのは、リバイバル派よりは、むしろプリンストン神学校に代表されたオールド・スクール (the Old School) の側²²であった。

こうした状況は、南北戦争後から第一次大戦の時期にかけて変化した。『米福音派』が叙述しているように、工業化に伴い、ヨーロッパの非プロテスタント諸国から移民が流入し、大都市では伝統的なプロテスタントの価値観や道徳に囚われない人々が増大した。この変化はプロテスタント教会に当然影響を与えることになった²³。この時期の信仰復興運動の担い手であった D. L. ムーディーやホーリネス運動の影響を受けた人々、さらにディスペンセーション神学を受け入れた人々は、都市化や世俗化が進み、近代思想の影響や退廃的な娯楽が広まる中で、失われつつあった合衆国の伝統的価値観を擁護することに注力するようになり、やがてこうした流れは根本主義運動に収斂されて行く²⁴。

さらに 20 世紀前半、特に第一次大戦後になると、根本主義と近代主義の対立が先鋭化した。この根本主義・近代主義論争以後、近代主義者が主要教派に留まるようになり、逆に急進的な根本主義者が分離することになった。同時に根本主義・近代主義論争は、正統主義を重視する人々の中にも穏健派と保守派との分裂を引き起こしたのではないか。その結果メイチェンのような保守的正統主義者が、信仰復興運動の流れを汲む人々と協調することになった。つまり

¹⁷ 『米福音派』475-485 頁

¹⁸ 『米福音派』11 頁、「歴史的考察」123 頁

¹⁹ つまり『米福音派』は、福音主義を、宗教改革の伝統を忠実に受け継ぐ流れと理解しているのではないか。『米福音派』56、66 頁

²⁰ ただジョン・ロックなどに代表される独立革命以前の啓蒙思想はある程度受容していた。G. Marsden, *Understanding Fundamentalism and Evangelicalism* (Grand Rapids: Eerdmans, 1991), pp.126-131.

²¹ C. E. Hambrick-Stowe, *Charles G. Finney and the Spirit of American Evangelicalism* (Grand Rapids: Eerdmans, 1996), pp.274-275.

²² 改革派正統主義の伝統を重視するグループ。

²³ 『米福音派』56-66 頁

²⁴ Marsden, *American Culture*, pp. 223-224.

根本主義陣営ではオールド・スクールの継承者と、ムーディー、ホーリネス運動、デイスペンセーション神学の流れとが連合を形成したのである²⁵。

このように 19 世紀から 20 世紀前半のアメリカ・キリスト教史を振り返るなら、現在も続く福音派とリベラル派の対立の重要な起源は、根本主義・近代主義論争の時期に求められることになる。福音派を理解しようとする場合、この対立を重視するのであれば、20 世紀アメリカ福音派の起源を根本主義の発生期に求めるのは当然であろう²⁶。

ただ近代主義との対立の構図から離れて、アメリカ福音派の重要な起源はどこにあるのかを問う場合、根本主義以前のどの時点に遡らせるかについては異なる見解もある²⁷。例えば青木が研究史的概観の中で触れているように M. Marty はアメリカ福音派の起源を 18 世紀の大覚醒に求める²⁸。福音派の特質、

²⁵ 神学的には多くの点で立場が違ったにも拘わらず。Marsden, *American Culture*, pp.117-118.

²⁶ ただ英語圏における福音主義は、17-18 世紀の理神論の拡がりを背景に隆盛した面もあり、広い意味で福音派とリベラル派の対立は、18 世紀北大西洋兩岸の信仰復興運動 (the transatlantic revival movements) の時期にも認められる。Noll, *Rise*, pp.33-44.

²⁷ 福音派の伝統の重層性は既に宇田『福音主義』49-152 頁が指摘している。アメリカ福音派の起源を 19 世紀以前に遡らせて理解しようとする試みについては、L. I. Sweet, 'Evangelical Tradition in America,' in *The Evangelical Tradition in America* (Macon, Ga.: Mercer UP, 1984), pp.2-7 も参照。

²⁸ M. E. Marty, 'Tensions within Contemporary Evangelicalism,' D. F. Wells and J. D. Woodbridge, eds., *Evangelicals* (Nashville, TN: Abingdon, 1975), p.191; 『米福音派』25 頁。Noll もこれに近い立場であり、福音的信仰を「真の心の宗教」と表現し、その起源をドイツ敬虔派などに求めつつ、特にホイットフィールドの神学思想や実践に、その否定的側面も含めて一つの原型を見出す。Noll, *American Evangelical*, p.10; idem., *Rise of Evangelicalism*, pp.13-15, 96-101, 143. マクグラスも福音主義の起源をメソジスト運動に求める。A. E. マクグラス、稲垣久和監訳『ポスト・モダン世界のキリスト教』(教文館、2004 年) 65 頁。Marsden も evangelicals/evangelicalism を信仰復興運動に由来すると理解している。Marsden, *Understanding*, p.2. 藤本満「18 世紀英米リバイバル—ホイットフィールドとカルヴァン派メソジスト」『ウェスレー・メソジスト研究』第 12 号 (日本ウェスレー・メソジスト学会、2011 年) 3-20 頁も、福音派の源流が、1730 年代に英国と新大陸で起きた信仰復興運動に遡ると捉える。藤本による 2013 年 6 月の東部部会研究会での発表

即ち新生 (聖霊) 体験や超教派的交流を重視する傾向²⁹は、既に 18 世紀の第一次信仰復興運動 (大覚醒) に認められ、これらは 19-20 世紀の福音派にも継承された。そうした特質を福音派の重要な形成要因と見るならば、現代アメリカ福音派の重要な起源は 18 世紀の大覚醒に求められる³⁰。

そしてこの見解は、なぜアメリカに福音主義者が多いのかという、『米福音派』の提起した問いに関連する。すでに Marsden が指摘しているように、信仰復興運動は、必ずしもアメリカ独自の現象ではない。敬虔主義やメソジスト運動など、類似の刷新運動は欧州や英国にも起きていた。しかしアメリカにおいて宗教的リバイバルや新生の体験は、恐らく欧州・英国以上に深い刻印を残し、国民的文化の一部を形成するまでになった。アメリカでそれが可能であったのは、欧州や英国に既に存在していた宗教秩序や伝統が、新大陸には希薄であったからである³¹。アメリカの信仰復興運動が、欧州・英国以上に固有の文化的伝統を形成する運動となったとすれば、現在もアメリカに福音派が多いのは当然と言える。そしてこの福音派の起源に関する立場は、『米福音派』が取り組んでいる問題、即ち「なぜアメリカ合衆国に福音派が多いのか」を議論する場合、避けて通ることのできないのではないだろうか。

「福音主義の特色」もこの立場の重要性を示唆しているのではないか。
http://www.evangelical-theology.jp/jets-hp/jets_sections_east.htm/20130617_jets-e_fujimoto_resume_with_npw.pdf 森本あんり『反知性主義』(新潮選書、2015 年) も、アメリカの反知性主義を信仰復興運動の伝道者たちの系譜(ホイットフィールド、フィニー、ムーディー、サンデー)に辿りながら、根本主義・福音主義のルーツを信仰復興運動に求めたと解釈できる。

²⁹ あるいは教派の教理的伝統より、清められた生活によって証しされる個人の聖霊体験にキリスト教信仰の共通の基盤を見出そうとする傾向。

³⁰ 青木も、ムーディーに代表される根本主義の流れが信仰復興運動の系譜に連なることは認める。『米福音派』82 頁

³¹ Marsden, *American Culture*, pp.11, 223-224.